

Title	東京インフォミドル：生成と可能性
Sub Title	
Author	川崎, 賢一(Kawasaki, Kenichi)
Publisher	慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所
Publication year	2001
Jtitle	メディア・コミュニケーション：慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要 (Keio media communications research). No.51 (2001. 3), p.51- 68
JaLC DOI	
Abstract	<p>本稿の目的は、社会科学特に社会学的観点から、東京が持っている新しい発展の可能性を探ることである。その点を当事者たちはあまり自覚していないかもしれないが、東京文化に焦点を当てて論じてみたい。東京文化に焦点を当てる理由は、客観的理由と規範的理由とがある。前者は、文化産業や情報産業が占める割合が、東京は、日本の中では極めて高いからである。新しい産業は新しい可能性を生み出そうとしている。その点にまず着目する必要がある。規範的理由というのは、「文化へのこだわり」である。第二次大戦後、平和主義を唱え、主観的には、その平和主義に沿って社会を運営してきたと多くに日本人により考えられてきた。しかし、その実質や、諸外国に対し、どれだけの影響力や連帯を築いてきたかについては大いに疑問が残る。(もちろん、全くなかったというわけではないが。)最近の、社会主義の退潮は、平和主義をさらに脆弱なものにした。例えていうと、今までは、風呂屋の壁の絵程度には意義を持っていたが、その風呂屋自体が取り壊されそうな状態にあるともいえないだろうか。私がいいたいのは、平和主義にとって、文化というのは極めて重要な要素であるということである。文化に基づいた、経済・政治などが、平和主義を支える社会的実体として機能しようと思うし、この観点から、東京文化が捉えられる必要があると思う。</p> <p>もう一つの目的は、東京文化を、単に、日本という国家の文脈でだけとらえるのではなく、地球社会、正確には、グローバルシティと関連づけて分析することである。東京という都市は、そこに住む人々が考えているよりも、良い悪いは別にして、現代的性格を数多く持っている。それだけでなく、国際的競争力を文化は持っている。この点を正確に自覚し、よりよい文化を創ることが切に求められているように思う。しかし、実際には、次のような2つの傾向が、ある意味で、矛盾する動きの中で大きくなってきている。一つは、極めて強い商業主義的な性格を持つようになってきているという点である。もう一つは、日本のような文化的多様性を持つ文化の内部で、依然として、棲み分けが行われ、文化同士の混じり合いがあまりみられないことである。特に、伝統文化や西欧発の新しい伝統芸術文化、そして、いわゆるポピュラー文化の間には、この原理が働いているように見える。この現状の持つ、意味と問題点についても分析をする必要があるだろう。</p>
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20010300-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

東京インフォミドル： 生成と可能性

川崎 賢一



▶ 要 約

本稿の目的は、社会科学特に社会学的観点から、東京が持っている新しい発展の可能性を探ることである。その点を当事者たちはあまり自覚していないかもしれないが、東京文化に焦点を当てて論じてみたい。東京文化に焦点を当てる理由は、客観的理由と規範的理由とがある。前者は、文化産業や情報産業が占める割合が、東京は、日本の中では極めて高いからである。新しい産業は新しい可能性を生み出そうとしている。その点にまず着目する必要がある。規範的理由というのは、「文化へのこだわり」である。第二次大戦後、平和主義を唱え、主観的には、その平和主義に沿って社会を運営してきたと多くに日本人により考えられてきた。しかし、その実質や、諸外国に対し、どれだけの影響力や連帯を築いてきたかについては大いに疑問が残る。(もちろん、全くなかったというわけではないが。)最近の、社会主義の退潮は、平和主義をさらに脆弱なものにした。例えていうと、今までは、風呂屋の壁の絵程度には意義を持っていたが、その風呂屋自体が取り壊されそうな状態にあるとでもいえるだろうか。私がいいたいのは、平和主義にとって、文化というのは極めて重要な要素であるということである。文化に基づいた、経済・政治などが、平和主義を支える社会的実体として機能しうらと思うし、この観点から、東京文化が捉えられる必要があると思う。

もう一つの目的は、東京文化を、単に、日本という国家の文脈でだけとらえるのではなく、地球社会、正確には、グローバルシティと関連づけて分析することである。東京という都市は、そこに住む人々が考えているよりも、良い悪いは別にして、現代的性格を数多く持っている。それだけでなく、国際的競争力を文化は持っている。この点を正確に自覚し、よりよい文化を創ることが切に求められているように思う。しかし、実際には、次のような2つの傾向が、ある意味で、矛盾する動きの中で大きくなってきている。一つは、極めて強い商業主義的な性格を持つようになってきているという点である。もう一つは、日本のような文化的多様性を持つ文化の内部で、依然として、棲み分けが行われ、文化同士の混じり合いがあまりみられないことである。特に、伝統文化や西欧発の新しい伝統芸術文化、そして、いわゆるポピュラー文化の間には、この原理が働いているように見える。この現状の持つ、意味と問題点についても分析をする必要があるだろう。

▶ 1 グローバリゼーションの進行と東京インフォミドルの出現

現代社会に関しては、様々な言説がされてきているが、おおかたの見方に共通するのは、社会全体が変化しつつあるという認識である。もっともラディカルな見方は、アルビン・トフラーが提唱した<第三の波>、いいかえると、情報革命（Information Revolution）という認識である。すなわち、農業革命・産業革命に続く、大きな社会構造の変化の時代にあると考えるのである。これは、マニュエル・キャストルのようなラディカルな社会学者でも、この立場に立っている。

第二の見方は、ポストモダニズムの立場である。ポストモダニズムについては、その内容が、近代社会との連続性を強調する立場から、その逆に非連続性を強調する立場まで、あるいは、その変化に対する評価が否定的なものから肯定的なものまで、様々な立場がある。肝心の点は、近代社会と何らかの点で共通するものをその理論の出発点にしている点と、しかし、同時に、近代社会とは基本的に異なる性質を指摘しようとする点、を同時に内包しているという点である。

その二つの見方の内、どちらのポジションをとるにせよ、何らかの、根本的な新しい社会的変化は、それを主に担う人間たちが存在することを意味する。それを典型的に示す事例が、<東京インフォミドル（Tokyo Information-Middle）>である。これが、本稿の考察対象である。もちろん、これだけの説明では、十分にわかりにくいので、以下、この人たちがどういう人たちなのか、どういう風に出現してきて、どういう性質を持ち、どのような限界と可能性を持つのかということ以下で、明らかにしていきたい。まず、第1章では、インフォミドルという層が、グローバリゼーションというマクロなトレンドの中で生まれてきたことを明らかにする。そして、それが、同時に、日本的な条件のもので残存する階層の生まれ変わりという部分を併せ持つことも説明される。続く、第2章では、インフォミドルたちの行動原理について説明する。彼らの新しい行動原理を<混在の美学>にもとめ、それについて論じる。第3章では、そういう彼らの行動原理が生まれてきた歴史的背景を、東京の歴史を概観することで説明を試みる。そして、第4章では、インフォミドルたちが活動している場所である、東京の特定の場所について概説をする。ポイントは2つあって、一つは、今までのオールドセンターが分散して、3つの方向に分かれつつあること。第二に、その中で、特に渋谷文化の重要性を強調してみたい。最後に、問題点と展望を大きく2つに分けて分析を試みる。第5章では、東京文化の新しいライフスタイルについて、第6章では、インフォミドルの意義と限界を総合的に検証する。

1-1 新しい文化階層としてのインフォミドル

インフォミドル（Information-Middle(略してInfo-Middle)：情報中産階層）というのは、情報革命を推進し、それを支えるような、新しい中産階層を形成するようになった人々を指す概念である。（川崎がこの概念を6年前から使ったのが、最初の使用例である。）ここでは、いわゆるインフォ・リッチとの区別をはっきり付けずに、次のような8つの性質を持つ人間像として描かれた。（川崎、1994、67頁。）

- 1．知識・情報欲求が強い
- 2．新しいものと求める指向
- 3．メディア・リタラシーが高い

- 4．積極性・集中力重視
- 5．「時間」確保可能性がある
- 6．社会材としてのネットワークを作れる
- 7．モデルチェンジ対応資力がある
- 8．「公共」的価値観を持っている

しかし、インフォミドルは、突然、科学者・技術者・コンピューター愛好家などの中から生まれてきたわけではない。確かに、コンピューター技術者・情報科学者・プログラマーなどが、元々の中心的推進役であったが、コンピューターが普及し、情報通信が高度化しグローバル化した今日においては、その階層は、隣接の職業や類似の階層まで含む、新しい知識階層を形成するようになっただけでなく、さらに広く文産業従事者や彼らに追随するような層までを含むところまで拡大しつつあると見ていいようになった。インフォミドルという概念は、単一の概念ではなく、次のような、少なくとも4つの下位概念を持つ、すなわち、作り手・送り手・媒介者・利用者、の区別である。

作り手：単独でオリジナルなものを作れる能力を持つことは、最初の前提であるが、それだけでなく、異なる分野の人と協力しつつ、コラボレーションが出来ることが要請されている。

送り手：様々なメディア、様々なネットワークをどれだけ持っているか。そのネットワーク力が問われている。

媒介者：現代社会で最も重要な機能を持つ。媒介者には、多くのバリエーションが生まれつつある。その中で、カタリスト（触媒者）の役割も重要である。

利用者：高度な消費者が誕生した。問題は、それがマスのレベルにとどまるのかという点である。新しい、質的にレベルアップした利用者の登場が待たれる。

繰り返しになるが、これらの中で、媒介者の重要性をもう一度指摘しておきたい。なぜ、重要なのかというと、コンピュータや通信技術を用いる文化は、オリジナリティ重視から、変形能力・創造的ハイブリディティ生成能力などが重要視されるようになってきている。そして、作り手の作品を、いかに利用者につなげるかに関して、様々な社会的役割が生じてきた。例えば、芸術分野では、キュレーターと呼ばれる職業は正にその例である。例えていえば、パーティの主催者のようである。いくら、御馳走があっても、いくら良い部屋があっても、人々を盛り上げるには、それをセッティングし、楽しめる催し物を計画し、人々をもてなす社会的役割を遂行する人間が必要である。それが、媒介者なのである。

1-2 グローバリゼーションと階層分化——インフォリッチとインフォブア

このインフォミドルという階層は、日本だけでみられる現象ではない。情報化が進み、情報通信環境が整っている社会において共通にみられる現象である。もっといえば、コンピューターメーカーやコンピューターソフト産業などの、巨大な多国籍企業と、大学研究者や企業研究者などの国際的知識階層を中心に支えられてきた現象ということが出来るであろう。彼らの国際的知識階層や国際的中産階層からなる国際社会に限っていえば、いわば、グローバルな展開がなされており、もっとも、国境が低く、グローバリゼーションの度合いの高い領域ということが出来るであろう。

しかし、彼らの世界から、一歩出てみると、異なる様相を呈している。グローバリゼ

ーションを主導するのは、国家というより、グローバルシティと呼ばれる特定な都市である。その典型的な都市は、ニューヨーク・ロンドン・東京などである。グローバルシティ論の教えるところによると、グローバルシティ化が進むことにより、新しい階層分化が生じるとされている。階層分化は、一方で、ジェントリフィケーション（gentrification：中・上流階級化）が進行するが、もう一方で、彼らを支える新しい貧困階層が増大するとされる。前者は、典型的には、専門職などが中心であり、後者は、サービス業（公園清掃者・ガードマンなど）等である。80年代後半から90年代にかけて、ロンドンやニューヨークでは、この動きがはっきりとした。例えば、この分野の著名な研究者であるモレンコフやフェインシュテインらは、この点を指摘しており、ニューヨークでは、90年代初頭には、36%が新中間階層、30%が新貧困層に分類されている。（J.H.Mollenkopf & M.Castells, 1991, S.S.Fainstein, I.Gordon & M.Harloe, 1992, K.Kawasaki, 1997）

東京の場合、グローバリゼーションへの巻き込まれが比較的弱かったのも、ここ3・4年くらい前から（いわゆるビッグバンや規制緩和の開始とともに）、同様の傾向がみられるようになってきたが、ニューヨークのような極端な2極分解を遂げるとは見えない。というも、すべての企業がグローバリゼーションに対応する必要があるわけではなく、日本の集団主義による企業運営を続ける層がなくなるとは思えないからである。（むしろ、グローバリゼーションの進行は、東京では、グローバルな企業とドメスティックな企業とははっきりと分かれてきているのではないだろうか。前者は、いわゆる多国籍企業で、他の多国籍企業と同様な変化を遂げていくだろうが、後者は、日本国内マーケットを対象にした企業により専念していくように思われる。）そう考えると、東京の場合、インフォミドルと呼ばれる人々は、2つのタイプが併存していく可能性が大きいであろう。つまり、多国籍企業型のインフォミドルとドメスティック企業型のインフォミドルとである。（正確には、いくつかのタイプの日本の経営が、変形を遂げながら、残存していくと考えるべきだろう。）

1-3 健全なインフォミドルの必要性

意外に知られていないのは、人間がこれまで築いてきた社会のほとんどが、中産階層が少ない社会だったという事実である。一部の豊かな上流階級と大多数の貧困な被支配階層というのが、階層に関する基本図式なのである。貧困からの脱出こそが、人類の進歩を支える最重要な動機であったといってもいいだろう。産業社会というのは、そういう意味で、人類の歴史上初めて、中産階層が多数輩出した社会といえよう。その典型は、イギリスでありアメリカである。イギリス社会は、大土地所有者や資本家階級を中心に中産階層を内発的に継続して発展させてきた社会である。中産階層が上流階層に対立しつつ、上流階層と折り合いをつけながら、軍隊をコントロールしてきた国家である。その意味で、過去を残存させながら、発展を遂げてきたともいえよう。したたかで経験豊富な中産階層が多数派であるのがイギリスの強みである。アメリカの場合、イギリスからの移民を中心に、新しい中産階層を同様に内発的に育て上げてきた社会である。異なるのは、上流階層がいなかったということである。また、信仰心が厚く、独立と自由を重んじる国民性が作り上げられた。日本においては、アメリカのごく一面しか伝えられていないことが多いが、彼らの自由の背後には、信仰と責任が隠されている。資本主義的自由の背後には、厳しい自己規制や社会的貢献の必要性の認識などが隠れている。この点を十分に理解する必要がある、表面的に〈自由＝勝手〉と彼らの行動様式を理解するのは片手落ちである。

この点は、実は、東京のケースを分析するときには決定的に重要である。グローバルゼーションへの対応として、規制緩和と能力主義の再考が要請されているように考えられている、最近の東京では、彼らの自己規制や社会的貢献について、十分な理解が得られているようには、私には思えない。首都圏では、実質的な長時間労働（サービス残業・携帯電話と通しての社外労働など）や長時間通勤、そして、依然として高額な住宅取得などは、構造的に豊かな生活スタイルや男女平等制度の実現の行く手をふさいでいる。その意味で、健全な中産階層が成立しにくい条件が依然として残っていると考えるべきであろう。

要するに、一般的にいて、新しい社会や文化の創造には、健全でフェアな中間階層が求められているのである。そういう中間階層を東京や首都圏でどう形成することが可能かどうか、この点は今後の日本社会にとって極めて重要な課題でもある。（ただし、私がここで指摘したいのは、下層階級やアンダークラスの人々はどうでもいいなどということではまったくない。分析の焦点を中産階級に、単に置いているだけで、彼らには新しい問題が形成されることは確かであり、また、その問題を解決されるべき必要性があることも追記しておきたい。）

▶ 2 東京インフォミドルはどこにいるか？

2-1 インフォミドルの町：渋谷、自由が丘、三軒茶屋、下北沢、吉祥寺

インフォミドルたちは、どこに住んでいるのだろうか？あるいは、どういう場所に集まりやすいのだろうか？この2つの素朴な疑問に答えることから始めよう。

確かに、東京中に、インフォミドルが散在していることは確かなことである。しかし、よくよく観察すると、中心とまではいなくても、文化産業や情報産業が集積している地区やその周辺に、彼らが居住し、それらの集積地に集まりやすいという傾向がある。電通総研が1998年にまとめた「情報メディア産業の都市集中：東京情報集中」（以下略して「東京情報集中」報告書）という報告書によると、1996年では、上場会社の社長や役員 の 在 住 地 ベ ス ト 3 は、 共 に、 世 田 谷 区（17.6%）・杉並区（8.8%）・大田区（7.5%）という、東京西南部の郊外に居住しているという。（これに、4位以下の練馬区・目黒区・港区を加えると、情報産業集積地を西から南に取り囲むように立地していることがわかる。また、日本全体で見ても、社長を例に取ると、東京都（31.6%）と神奈川県（11.8%）に集中している。（ちなみに、関西が次に多く、兵庫県（9.9%）・大阪府（9.8%）となっている。）いかに、東京と神奈川に集中しているのかがわかる。これは、他の分野（例えば、映画関係商社役員居住地・民放キー局役員居住地など）でも、基本的に同じ傾向を指摘できる。

明らかなことは、彼らの居住地には、ある傾向性がある、何度も指摘してきたが、1つの場所に集中していることはない。しかし、場所という点で、渋谷・原宿・青山、道路でいうと国道246号線、鉄道でいうと、渋谷を発着する、あるいは、通過する線（例えば、JR山手線・東急東横線・東急新玉川線（地下鉄半蔵門線）・地下鉄銀座線・京王井の頭線など）沿いに、明らかに集まっているのである。

これらのインフォミドルやインフォリッチの人々やその家族などが、よく利用する町は、したがって、典型的な中産階級の町である。例えば、先にあげた、渋谷・原宿・青山は、それぞれ歩いても行ける町である。さらに、それらを取り囲むように、西南部から時計回りにあげると、まず、自由が丘がある。この町は、おそらく、西の芦屋と並ぶ、アッパーミドルやミドルクラスの女性たちが集まる町である。次に、三軒茶屋と二子玉

川をあげることが出来る。前者は、渋谷から近く、ポピュラーな居心地とアートフルな都市再開発が進みつつあり、後者は、典型的な郊外型の中産階級御用達の車で行ける消費地である。それから、下北沢そして成城学園である。下北沢は、若者の街であり、かつ演劇やパフォーミングアートが息づく町でもある。それに対して、成城学園は、田園調布と並ぶ高級住宅街である。最後に、吉祥寺をあげることが出来る。吉祥寺は、渋谷から行くと井の頭線の終点であるが、中央線に代表される、古いタイプのリベラリストが多く住む武蔵野文化の中心地の一つであり、かつ、二つの西武線(西武池袋線・西武新宿線)住宅地への入り口でもある。

2-2 東京インフォミドル生活スタイル 混在の美学

東京インフォミドル達の生活スタイルはどういうものだろうか？それを考えるときに、大切なのは、東京文化に内在し、エスタブリッシュされた文化のプロトタイプ(原型)である。結論からいうと、それは、何か単一なはっきりとしたものではなくて、<混在の美学>ともいうべき型である。<混在の美学>とは、様々な文化的パターンを同時の存在させることを良しとする行動様式・思考様式・好みの総称である。様々な要素を組み合わせて、それに一貫性を優先させないやり方ということも出来るかもしれない。なぜ、このようなパターンが確立したかについては、次章で歴史的経緯を追って説明するつもりであるが、簡単に説明を試みたい。それは、まず、東京という都市が、武士により軍都・政治都市として発展させられたからである。全く同じではないが、ブラジルのブラジリア・オーストラリアのキャンベラなどがその類似例としてあげられる。しかも、途中で変質した部分が大きいとはいえ、ミリタリズムによる支配が260年余り継続し、その後、20世紀にも数十年間軍部により再支配されたという事実である。また、明治以降も本格的な都市計画が実現できなかったという歴史的事実も尾を引いている。その結果として、入り組んだ、様々な階層の人が混在する都市東京ができあがったのである。

この点は、同じグローバルシティである、ロンドンなどと比較をすると興味深い。東京とロンドンの共通点は、道路が入り組んでいるところである。ロンドンの都市としての歴史は古く、ローマ人がロンドンニウムという名前で都市を築き上げた西暦43年まで遡ることが出来る。彼らは、直線を使った都市形成を好んだが、今では、その面影は、有名なオックスフォードストリートに見ることが出来るくらいである。基本的には、その後入り組んだ町並みになっていった。しかし、東京とロンドンが異なる点で重要なのは、ロンドンでは、街路ごとに建築物が統一されていて、街路ごとに共有の公園などが残っていることである。鈴木博之によると(1996)、王族を含む貴族などの大土地所有者が今でも残っていて、ロンドンの住宅地の建設に一役買っているからだという。集中的土地所有が今も残存し、中世の土地所有が現在でも残っているのである。したがって、土地所有者が同じ街区では、ある程度の統一性などをもたらすことができるのである。

しかし、東京においては、先にあげた、インフォミドル達が好む町を見てみると、一部の例外を除いて、意外にも都市計画がなされた場所が多い。例えば、田園調布・自由が丘・成城学園などは、大正から昭和の初期にかけて大規模開発がなされてところで、市民文化の歴史をある程度積み重ねてきた場所でもある。これらの対極にあるのが、渋谷区や港区などに残る<混住>地域である。例えば、六本木界隈や麻布十番、あるいは、溜池山王や広尾あたりを散策すると、様々な住居が混在していくことの気づくのは容易である。立派なお屋敷・外国人向け豪華マンション、そして、江戸時代から続いてような寺院や小売業(三味線や和菓子屋など)、その一方で、木賃アパートが散在している姿が、それである。この<混住>状況を的確に指摘し、そこに東京文化の特色を見だし

たのが、ユニークな写真家で知られる都築響一である。彼の写真集である「TOKYO STYLE」(1997)で、「小さい部屋にごちゃごちゃと、気持ちよく暮らしている人間」(p. 19)が、東京という空間を楽しむ姿を、積極的に描き出している。この暮らし方は、ある意味で、合理的な生き方であり、ある程度の広さの居住空間をあきらめることにより、逆に、東京という空間を十分に堪能することが出来るという生活スタイルを指摘している。一方における、郊外住宅と、もう一方における混住文化、この2つにより、東京の現代的な都市文化を特色づけることが可能になるように思う。

2-3 混在第一軸：国際性と伝統性、中産階層の混在

しかし、もう少し丹念にこの2つの文化の並立を分析してみると、実や、2つの異なる対照的な概念で、分類・整理することが出来るであろう。その一つは、国際性と伝統性とでもいうべき軸であり、もう一つは、ファインアートカルチャーとポピュラーカルチャーというべき軸である。この節では、前者について説明していった見よう。

国際性と伝統性は、東京の現実に即していうと、正確に言うると対立軸ではない。国際性の大小、どの国際性かという軸と、京都や江戸に象徴される日本の伝統の大小という軸とが、しばしば並立するのである。もちろん、国際性という場合は、外交官・多国籍企業関係者・専門職（証券マン・銀行マンなど）・タレント（スポーツ選手などを含む）等の中流階層と、留学生や外国人労働者などの非中流階層とははっきりと地理的居住について区別することが出来る。前者については、数十年前までは、アメリカ人やイギリス人が中心であったが、現在は、様々な国籍の外国人を含むようになった。彼らの多くは、港区・千代田区・渋谷区、さらに、目黒区・世田谷区などにも住むことが多い。大使館や会社は、千代田区・港区・渋谷区などに立地し、自ずとその周りに住むことになる。

一方で、東京には江戸にまつわる建物や遺跡が数多く残されている。大方のイメージでは、台東区や江東区などの下町と呼ばれる場所に残っていると考えられているが、必ずしも実態に合っていない。というのも、江戸時代の後期に江戸が大きくなった時期に、市街地だった場所かどうか、第二次大戦時に空襲の被害にあったかどうか、によってその残り方が異なるからである。前者で重要なのは、武士の居住地であったか町人の居住地であったかである。後者では、意外に、港区や渋谷区などでは、都市化を免れ、江戸がまだ現在でもかなり残っている地域である。

例えば、その例として、麻布や広尾をあげることが出来る。現在の住所としては、港区元麻布・西麻布・南麻布、そして、渋谷区広尾のあたりである。このあたりは、中上流階層の外国人が多く居住するあたりである。沢山のレストランや高級スーパーが存在し、国際的と称される場所でもある。しかし、その一方で、空襲されなかった場所（例えば、麻布十番など）も残り、例えば、地下鉄広尾駅周辺には、仏教寺院がかなり集まっているところがある。また、その周辺には、三味線屋やお茶席用の和菓子屋などが散在し、江戸の雰囲気も味わえるのである。しかも、面白いのは、個人住宅や高級マンションに混じって、木賃アパートや普通のモルタル製の共同住宅なども混在しているのである。この「混住性」こそが、先に述べたように、東京を特色づける。また、もう一つの例として、赤坂から溜池山王にかけても、似たようなことを指摘することが出来る。（現在の住所では、港区と千代田区になる。）ここには、例えば、比較的最近都市計画により作られた人気スポットがある。この辺は、全日空ホテル・テレビ朝日・サントリーホール・森ビル等の一帯である。しかし、これらのビルの対面から、赤坂にかけての場所には、平屋や2階建ての住宅が残り、魚屋や豆腐屋、割烹などがかなり残っている。

その一方で、高級マンションも数多く見られるのである。赤坂ツインタワーのすぐ横に、大正時代や昭和初期を彷彿する建物が混在している場所、私は訪れるたびに、不思議な感慨を抱く。

2-4 混在第二軸：混合するファインアートとポピュラーカルチャー

もう一つ、東京文化を分析するとき大切なのは、ファインアートカルチャーかポピュラーカルチャーかという区別である。これも、厳密にいうと、この二つの文化が並立している場合がしばしば見られる。だから、ファインアートカルチャーの度合い、ポピュラーカルチャーの度合い、という軸の並立として捉えることが出来る。ここでいうファインアートカルチャーというのは、元々は西欧起源の芸術を指し、日本に輸入された文化で、具体的には、絵画などの美術、オーケストラやオペラに代表されるクラシック音楽、舞踏・前衛演劇などのパフォーマンスアーツなど、幾つかのジャンルに分かれる。一方のポピュラーカルチャーは、アメリカ起源のものが多し。(これも、内容は多岐に分かれるのはいうまでもない。)重要なのは、その接触の仕方と普及の仕方である。後に詳しく述べるが、従来の言い方では、アメリカにあこがれて、一種の劣等感を持ってポピュラーカルチャーを受容してきたという説明がされる。しかし、80年代以降、そういう年代層は高齢化し、青年層ではそのような傾向は見られなくなった。これをもう少し掘り下げてみると、そもそも、日本のポピュラー文化は、その出自自体が、都市の新興中産階層を中心に受容されたという歴史的事実が浮かび上がってくる。つまり、西欧のような階級対立、アメリカのような潜在的な階層対立(WASPとエスニックカルチャー)を、日本の場合はそもそもひきづっていないという点が重要である。(これは、東アジアや東南アジアについても同様な指摘をすることが出来る。)(川崎, 1994)

▶ 3 東京文化はいかにして生まれたか

東京インフォミドルがなぜ成立するようになったのかは、偶然ではない。はっきりとして、歴史的必然性が存在する。どういう必然性があるのか、東京の都市の歴史と関連づけて説明してみよう。(川崎賢一, 1994)

3-1 江戸の創立と江戸文化の成立(政治・軍事センター)

東京は、社会学者加藤秀俊の分類(千年都市・五百年都市・百年都市の三類型)によれば、真ん中の五百年都市に分類される。(加藤秀俊, 1990)金沢などと並んで、かなりの伝統を持った都市といえるであろう。しかし、金沢は第二次大戦時に空襲を受けず、歴史が継続したのに対して、東京はそうではなかった。そもそも江戸時代にはたびたび大火災が起きたし、大正時代には、関東大震災で都心部は壊滅的打撃を受けたし、第二次大戦時は、米軍の空襲により都心部は焼け野原になった。(その象徴は、1945年3月10日のいわゆる東京大空襲である。)江戸時代はともかく、震災や空襲の直後には、大規模な都市計画が可能であったにもかかわらず、様々な事情により、結果としては、ごく一部分を除いて、効果的な都市計画がなされることなく、都市が発達してきた。東京タワーや都心の高層ビルから見ることのできる、見慣れた、連綿と続く、雑多なビルや建物からなる風景は、こうして出来上がったのである。

ところで、そもそも、江戸という都市は、政治的・軍事的センターという機能を最初に持ち、それが、現在に至るまで保持されてきた。この点は決定的に重要で、東京は、日本という国家の政治的かつ軍事的な中心地であり続けたのである。(もし、国会などの政

治的機能が、首都機能移転により、本当に移ることになれば、極めて大きな変化ということが出来る。)と同時に、この国家の中心地という性質は、<地方としての東京>の発達を阻害する決定的要因でもあった。この点も忘れるわけにはいかない。

3-2 戦前：西洋民主思想の移入（東急沿線・田園調布，理想郷の建設）

第二次大戦前の日本と現代をつなぐ、最も重要な線は、都市計画された土地利用である。従来の見方は、どうしても、表面的な現象や出来事に目がいきがちであるが、もっとも基礎的な土地利用に着目する必要がある。というのも、第二次大戦時に至る、いわゆる総動員体制は、多くの市民文化や中産階級の文化を断絶させたといわれている。しかし、すべてが戦後変わったわけではない。むしろ、戦前との連続性を直視する見方も重要である。そして、土地利用の点ではそもそも、戦前と戦後はかなり連続性を保っているという点が重要なのである。

<混住都市東京>にあって、数少ない、都市計画された中産階級都市は、大正期から昭和の初期にかけて、いわゆる<郊外住宅地>として形作られていった。例えば、東急田園都市線沿線の桜新町は、その最初の例である。大切なのは、今日、最高級住宅街などといわれている、田園調布・成城学園などはすべて、この時期に大規模開発された郊外住宅地だったという事実である。その他にも、東急東横線やそれにクロスする沿線、あるいは、中央線の国立駅南口、西武池袋線大泉学園、等をあげることが出来る。

これらの郊外住宅地の中には、渋谷周辺が多いことに気づくのは比較的簡単であろう。東京インフォミドルが活躍する渋谷・原宿周辺には、それを支える中産階級の住宅地が広がっているという事実、これこそが素朴な<発見>でもある。

3-3 戦後：アメリカ西海岸文化への憧れ，近代都市・東京，ポピュラー社会の建設

第二次大戦後、あこがれの対象は、完全にヨーロッパからアメリカに移った。特に、その政治制度、大衆文化、フランクな国民性など、極めて多岐にわたり、あこがれた時期が続く。戦後の典型的な事例は、東急新玉川線・田園都市線沿線に広がる<田園都市>である。東京世田谷区から川崎市・横浜市にまたがる、これらの地域には、沢山の政治エリート・多国籍企業関係者のみならず、文化産業を動かす人々、つまり、インフォミドルの人々が住み着くようになる。彼らは、もちろん一様ではないが、その中心は、<アメリカ西海岸文化>人間ともいべき人々の登場である。特に、ロサンゼルス周辺やハワイを、自分の生活の一部とするような人々は、この地域に沢山出没するようになる。1990年代の初期に騒がれた和製ワスプ（White-collar Americanized Suburban Private,（「WASP：90年代のキーワード」, パルコ出版, 1989）は、まさに、この典型的な例といえよう。心理的に、あるいは、実質的に、アメリカを繰り込もうとしたのが、この時期の東京、インフォミドルたちを特色付けることができるだろう。（正確には、現在進行形というべきであろう。）

3-4 3つの近代化

東京文化を論じる際には、先にあげた、政治的・軍事的センター機能と、住宅文化の歴史の他に、東京の近代化という論点を追加する必要があるだろう。簡潔に言えば、3つの近代化による転換点があったといえよう。その3つとは以下のようなものである。

(1) 第一の近代化：経済センター（製造業，工業地帯）

第一の近代化は、経済的センターという機能である。江戸時代の後半から、上方（大阪）

に対抗するようになり、政治的消費都市として発展をはじめて以来、明治期の近代化政策の中心としてその地位を確立した。特に、第二次大戦後は、東京湾岸を中心にして、第二次産業の集積地として、1980年代以降は、第三次産業の集積地として発展を遂げてきた。また、同時に、外国企業が進出し、いわゆる、経済のグローバル化の中心地となった。

(2) 第二の近代化：文化的・国際的センター（外国文化の輸入基地）

第2の近代化は、文化的、特に外国文化の輸入基地としての機能を果たす側面である。第2次大戦前は西欧文化、第二次大戦後は、アメリカ文化を、国家が創った文化制度を拠点にして、コントロールしながら輸入してきた。（川崎賢一，1997）また、政治都市であること、グローバル都市でもあることから、様々な外国文化が集積する場所でもある。つまり、単に、様々な地方文化が向かう先だけではなく、国際的な文化の集積地でもある。

(3) 第三の近代化：新たなる情報的センター（新しい文化の創造と発信）

最後に、80年代後半から、新たに確立しつつある新しい機能は、新たなる情報的センター、という機能である。数は少ないかもしれないが、ある程度、東京から発信する国際文化・トランスナショナル文化・グローバル文化が見られるようになってきた。今までよくあるパターンは、欧米でまず認められてから、日本でその評価を確立するというパターンである。（例えば、ファッション産業や芸術の分野では、今でもよく見られる現象である。）しかし、アニメ産業・カラオケ産業・テレビゲーム産業などのメディア産業や10代のポピュラー文化は、東京発のものが数多く見られるようになってきた。好き嫌い、良い悪いは別にして、これらの文化はすべて、国家が関与してこない、すき間産業（niche industry）的色彩が濃い。

▶ 4 現代東京文化マップ パッチワーク的文化地図を解読する

それでは、東京インフォミドル達が作りつつある、現代東京文化を具体的に見ていこう。（電通総研，1998）電通総研の報告書で指摘されている、最も重要な変化は、オールドセンターから、3つの方向への分散である。かつてのオールドメディア（新聞社・出版社・印刷・放送局・広告代理店など）からなるオールドセンターは、大手町や霞ヶ関の周辺に位置していた。つまり、主に、千代田・文京・台東・中央区等に大手の会社が立地していた。しかし、新しい文化産業や情報産業、その他ファッション産業などはもう少し離れたところに立地してきたし、オールドメディア産業自体も、徐々に移動を始めた。その方向は、主に、3つある。一つは、湾岸コリドーと呼ばれる、東京のベイエリアあるいはウォーターフロント地区へ、そして、さらに、東は千葉の舞浜・幕張まで、南は、横浜みなと未来21地区まで広がろうとしている。二番目の方向は、新宿の副都心への方向である。しかし、なんといっても、港区・渋谷区を中心とした地域への文化産業の新しい集積は際立っており、良い悪いは別にして、新しい東京文化を渋谷周辺から発信していることだけは確かなことである。それでは、この大枠に沿って、もう少し詳しく説明していきたい。

4-1 湾岸コリドー

オールドセンターに集中していた様々な文化産業のうち、例えば、放送局・広告代理

店、一部大企業本社などが、湾岸地区に移転をし始めた。湾岸地区は、ウォーターフロントと呼ばれ、埋め立てられた地区や、再開発された海岸地区などからなり、新しい設備と広い空間を用意することが可能であり、比較的、オールドセンターに近い。例えば、フジテレビは、新宿河田町からお台場に移転した、その象徴的な例である。また、世界一大きい広告代理店である電通は、中央区築地から、新橋の海岸地区にまもなく移転する。

そして、これらのコリドーは、東は千葉県幕張まで、南は、神奈川県横浜市みなと未来21地区まで、拡張しつつある。幕張は、展示場として有名な幕張メッセを中心に、様々な企業の誘致に成功し、一步先を走っている。みなと未来地区は、当初の計画から遅れ気味ながら、幕張よりもさらに大きな、総合的な開発地区として、2005年には計画が完成する予定である。(地下鉄の延長もその頃には終わる。)

いずれにしろ、湾岸コリドーは、新しい文化産業の集積地になりつつあるといえる。

4-2 西新宿ハイテクタウン

もう一つの、新しい集積地は、新宿副都心から隣接の初台地区を含めた、西新宿ハイテクタウンである。そもそも、新宿は、日本でもっとも高層ビルが集積している場所である上に、東京都庁がオールドセンターである有楽町から、移転してきた新しい、商業的・行政的中心地であった。それに加えて、この地区が脚光を浴びることになったのは、都庁近くの初台地区に、NTTの本社と関連施設が移転してきたことだった。ここでいう関連施設には、東京オペラシティと呼ばれる高層ビルと新国立劇場が含まれる。前者には、NTTの関連施設や新しいタイプの博物館（ICC、NTTインターコミュニケーションセンター）が作られ、後者には、様々な芸術（オペラ・バレエ・演劇など）の新しい中心地となりつつある。

4-3 アニメコリドー（西武新宿線等の沿線）

先に述べた3つの新しい集積地とは別ではあるが、文化産業という点からいうと、現代日本を代表するアニメ産業を忘れるわけにはいかない。文化産業の集積地からはずれているが、アニメが多く集まっている東京西部地区がある。通常、それは、<アニメ・コリドー>と呼ばれている。性格には、西武池袋線・西武新宿線・中央線、の3つの電車路線沿いに、アニメプロダクションが集まっている。(これらの路線は、いずれも、池袋や新宿から西に向かう郊外電車である。)なぜ、ここに集積したのかは、はっきりしている。手塚治虫や藤子不二雄などの、初期の漫画家達が、西武池袋線沿線に住み、そこに漫画家が集まりだしたのがそもそもの始まりである。そこから、隣接する西武新宿線、さらに隣の中央線沿いに、広がっていったのである。

4-4 渋谷系文化

現代日本を代表するものに、ファッション・音楽・ゲームソフトがあげられる。これには誰も異存がないだろう。これらは、港区から渋谷・世田谷にかけて、集積しており、これらの地区が、文化産業を考える際に、最も重要な地区といえる。また、なぜ、ここに集積したのかは、偶然ではない。その理由を以下で分析してみたい。ただし、中味を3つに分けて説明していきたい。

(1) ファッション系タウン（渋谷、港、世田谷）

ファッション系の産業は、完全に港区と渋谷区に集中している。例えば、スタイリス

トのシェアは、36%が港区で、24%が渋谷区で占めている。デザイナーでいえば、33%が港区、18%が渋谷区であり、モデルエージェンシーに至っては、港区と渋谷区共に29%（いずれも1997年の数字）を占めている。

もう一つ忘れてならないのは、ティーンエージャーのファッションである。原宿を中心とした、ティーンエージャー向けのファッション産業は、おそらく、世界で最も質・量共に第一位を占めているようだ。1年に数度は、グローバル紙のInternational Herald Tribune等に取り上げられて、詳しく紹介されている。

(2) ルート246（食文化、ゲームソフト）

次にあげられるのは、国道246号線沿いである。あるいは、鉄道でいうと、地下鉄銀座線・東急新玉川線・東急田園都市線沿線である。これらの沿線には、ゲームソフト製作関係者が多く居住し、仕事をしている。最も有名なのが、プレイステーション2でおなじみの、ソニー・コンピューター・エンターテインメントである。筆者のインタビュー調査によると、ゲーム制作者は、この会社の近辺に住み、かつ、仕事をしているという。これは、ロンドンのソフト産業従事者やニューヨークのシリコンアレーなどと共通する傾向であり、一見意外な気がするが、よくよく考えてみると、合理的なやり方かもしれない。（ただし、日本の場合は、京都伏見・宇治にある任天堂のケースは、これとは対照的である。）

また、食文化という点でも、六本木・麻布・赤坂・青山・表参道・原宿・渋谷にかけて、様々な種類のレストランなどが林立している。そのレベルは極めて高いレベルにあり、ニューヨーク・パリ・ミラノなどに引けを取ることはない。

(3) 渋谷系文化（音楽産業）

最後に、最も重要なのは、渋谷を中心とした音楽産業である。特に、いわゆるJ-POPを含むポピュラー音楽にとって、渋谷は決定的な中心地である。渋谷区・港区・目黒区・世田谷区・新宿区などが、その集積地である。例えば、レコード会社は、1996年段階で、東京に実に89%が集まっているが、その中でも、港区（35%）・渋谷区（28%）・目黒区（13%）がベスト3である。音楽プロダクションや音楽関係出版社についても基本的には同じ傾向を指摘することが出来る。これと関連して、芸能プロダクションの36%は港区に、24%は渋谷区に立地している。文化産業製作者も、はっきりとしたことはわからないが、これらの地区ないし、その周辺の、世田谷区・目黒区・大田区・杉並区などに居住する傾向が強いようだ。わかっているうちで、写真家の場合、ちなみに、六本木・赤坂・麻布・青山・白金の順の居住地となっていて、これらはすべて港区である。

なぜ、渋谷なのだろうか？（西村晃・八田真美子、「渋谷系経済学」、PHP研究所、1999）なぜ、池袋や新宿ではないのだろうか？ 理由は2つ考えられる。一つは、文化的環境である。港区や渋谷区は、大使館が多く存在し、外資系企業も多く立地する。また、その周りに歩くでは、当事者やその家族が居住し、外国人中上流階級文化が存在する。それと同時に、芸術家もその近辺に居住し活動する傾向が見られることである。それから、もう一つの理由は、渋谷周辺は、東京では珍しい典型的な中上流階層の人々が居住し、生活圏としていることである。大正から昭和初期にかけて始まった大規模都市開発は、戦後の田園都市線開発まで続き、東急沿線を中心に、比較的整った居住環境と住宅改装を提供し続けている。もちろん、新宿から中央線、渋谷から西武線沿いにも、同じような住宅地が展開しているが、その規模が異なることと前者の要因が欠けている点、同様な展開が見られなかった。

▶ 5 21世紀のTOKYO STYLE 情報（文化）創造・循環都市としての東京

これらの新しい変化を受けて、東京文化の可能性ある将来を展望し、何らかのよりよい方向への文化の生成を提言してみたい。その前提として、文化が経済や政治と大きな関わりを持つようになったという社会的現実の変化が事実として存在するという点から出発したい。（言い方はいろいろあるにせよ。）それぞれ、2つに分けて説明していきたい。

5-1 「文化」を作るとは、どういうことか

まず、歴史的認識として、文化は長い間、主要な経済活動の外側におかれてきた。しかし、2つの方向から、文化的活動が経済へインパクトを与えるようになった。一つは、音楽産業に典型的な、エンターテインメントビジネスとしてのポピュラーカルチャーをあげることが出来る。CDの売り上げ・コンサート活動・様々なマスメディアへの関わりなど極めて多額のお金が動くようになった。

もう一つは、いわゆる芸術産業からの経済へのインパクトをあげることが出来る。例えば、美術の分野では、ミュージアムが社会的に大きな意義を持つようになり、ミュージアム・マネージメント、ミュージアム産業が叫ばれるようになった。音楽の分野では、様々なコンサート活動、それと結びついたCD売り上げなど、ポピュラー音楽に比べれば金額的には少ないかもしれないが、着実なファン層を獲得していることも事実である。最後に、パフォーミングアーツもその例としてあげられる。

良い悪いは別にして、文化が経済と連動することにより、経済活動（広告・流通・精算）の側からの圧力も加わるようになってきた。典型的には、ポピュラー音楽に見られる、過度の商業主義である。例えば、スペキュラキュラー（見栄えのする）な価値とか、セクシーさなどは、多くの国々で共通する価値観である。しばしば、中味とは関連なく、評価されることがしばしばである。これらは、文化的グローバリゼーションの一つに例としてあげることが出来るだろう。肝心なことは、文化が社会的に創られるようになったという事実である。

5-2 文化政策（文化の生成・循環・消費）と個人の文化へのコミットメント

もう一つは、文化が政治と大きく関わるようになったことである。通常は、こう説明される。先進諸国では、国民の生活水準が上がり、自己実現や自己表現の欲求が高まってきた。それに対応するために、行政の側が、芸術文化を中心とする文化活動に対して、サポート制度を整備するようになってきた。その制度の中味は、いろいろであり、アメリカのように、連邦政府があまり関わらず、NPOなどのプライベート・セクター中心のケースや、全く逆に、シンガポールのように、国家が文化政策の中心をになって、コントロールするケースもある。（ちなみに、イギリスや日本は、中間的なケースである。）その意味で、文化政策自体は、グローバル化しつつあるといっていいたろう。

大切な点は、文化政策のインプリケーションである。多くの場合、芸術家や芸術組織をサポートし、芸術活動を活性化し、芸術活動を多くの国民に広げるのがその目的と説明されてきた。しかし、文化政策には、説明されていない、自明であったり、意図せざる目的も隠されている。例えば、なぜ、文化政策が必要かという点、元々、ポピュラー文化の興隆に対抗するために、考え出された経緯がある。これは、西欧諸国のように、

階級文化がはっきりしている場合に顕著に見られる。日本の場合は、文化階層がはっきりと顕在化することなく、後に述べるように、棲み分けの原理が働いているので、それほどではない。

5-3 グローバリゼーションと文化の再生産

これら2つの現代的傾向は、言い換えると、<文化の経済化>と<文化の政治化>とすることが出来るかもしれない。そして、重要なことは、それぞれの国家を単位に見ていくと、国家内のとどまる現象のように見えながら、両者とも、異なるメカニズムを持っているが、グローバリゼーションという文脈で生じてきているという事実である。これらの傾向は、さらに、次のような共通の2つの結果をもたらしつつある。

(1) 文化生成・循環システムとしての情報ネットワーク化

まず、大切なことは、インターネットを初めとする、情報ネットワーク化という結果である。好き嫌いは別にして、ホームページ・オンラインショッピング・ネットワークグループの形成など、これらをあわせて、情報ネットワーク化と呼ぶとすると、文化活動自体、芸術系にしる、ポピュラーカルチャー系にしる、ニューメディア系にしる、すべて、このネットワークを持つか持たないかは、その活動範囲や質にとって、決定的に重要である。

(2) 情報ネットワーク化が引き起こすポピュラーカルチャーの対外的影響力

さらに指摘されるべき点は、インターネットの普及に伴い、いわゆる中流階級にとどまっていた文化活動の範囲は、大きくその境界を広げようとしている点である。また、階級対立を歴史的に抱えていない、日本やアジアのポピュラー文化の場合、その対外的影響力や競争力をつけつつあるといえよう。(アニメ・TVゲームなどに典型的なように。)

5-4 ロンドン、ニューヨークとの都市文化比較

ここで、東京文化を論じるにあたり、参考として、同じグローバルシティのロンドンとニューヨークを簡単に比較しておこう。まず、東京と両者が決定的に異なる点を指摘しておこう。もちろん、両者が同じではないことはいうまでもないが、東京では、いわゆるdecentralization(地方分権化)が進んでおらず、東京における民間の文化力は、芸術分野では強くない。それに対して、ニューヨークでは、そもそも、連邦政府の関与がほとんどなく、州政府・市当局・NPO(財団など)、個人的貢献などにより支えられている。(New York State Council on the Arts, 1996/1997 Funding Report, 1998) また、ロンドンの場合、元々は、国家の関わりが強かったが(The Arts Council of Britain)、一方で、有名な「Arm Length Policy」が確立し、国家と芸術活動との距離を採られる政策が採られていた。しかも、Decentralizationがすすみ、現在では、イギリス自体、大きく4つに分かれ(例:The Arts Council of England)、その一方で、ロンドン自体にも文化政策の社会的主体が活発に機能している。(例:London Arts Board)

もう一つ、両者に共通しているのは、芸術や文化産業がそれぞれの都市の経済に占める割合が大きいという事実である。ここでは、紙幅の関係で、ニューヨークだけを紹介しておく。(ロンドンについては、ロンドン芸術評議会の題している報告書を参考にするとうまいだろう。(London Arts Board, The Arts and Cultural Industries in the London Economy, 1996)) ニューヨークの場合は、市の経済活動全体に占める、芸術産業や関連産業(ツーリズムなど)の割合は、11%から15%に、1990年代に入ると達するようにな

る。また、労働市場に占める割合も10%程度を占めるようになった。つまり、市の経済をかなり支える社会的存在に成長したといえるのである。(The Port Authority of NY & NJ, The Arts as an Industry, 1993)

それに対して、東京の場合は、ロンドンやニューヨークほど、芸術産業や関連産業が強いわけではない。しかし、佐々木教授達の研究によれば、映画産業などの経済波及効果は大きいということがわかっており、過小評価は慎まなければならない。(佐々木雅幸, 1997)とはいえ、その違いを無視することはできない。

5-5 東京：巨大な消費的都市文化から文化創造・輸出都市へ

日本の場合、ニューヨークやロンドンなどのグローバルシティと共通する面もあるが、特殊な側面も存在する。東京の場合、芸術産業という面で見ると、ロンドンやニューヨークのような経済力はない。(相対的に、東アジアの中で比較すれば、その地位は高いとはいえる。)その理由は単純ではないが、国家が文化政策を通じて関わり続けてきたことは、少なくとも関連があるだろう。また、メセナ活動などの力やNPOの力が弱いこと、東京都の役割が小さいことなども理由として考えられる。

その一方で、ポピュラー文化に関しては、いろいろ批判されてはいるが、その経済力の大きさ、国際的競争力が意外にあることなど、東京の新しい、しかも、重要な特色である。その特色が生まれた背景は、東京のポピュラー文化それ自体が、元々中産階級により生成されていった点であるとか、徹頭徹尾、国家が関わらずに、放っておいてくれたことなどが理由として考えられるだろう。(川崎賢一, 1994)ただし、アメリカのポピュラー文化などと異なる点もある。しばしば、指摘されている点であるが、その<無味無臭性>である。(岩淵功一, 1998)

要するに、巨大な文化省均・文化輸入都市という側面だけでなく、文化輸出都市の側面もようやくできてきたということが出来る。問題は、多くの知識人や政治関係者が考えていたのとは異なる分野が競争力をつけてきた点であろう。

▶ 6 再生の原動力としての東京インフォミドル：グローバルに競争力のある東京文化をつくるために

6-1 棲み分けの文化階層

東京文化は、単一な日本人により作られてきたわけでもないし、作られているわけでもない。見かけよりもずっと複雑な文化階層により作られてきたし、作られている。さらに将来的には、様々な外国人と共に作り上げられていくであろう、そういう文化だと思ふ。ただし、今まで機能してきた、様々な文化現象を支えてきた要因に共通する原則を指摘することは出来るだろう。それは、<棲み分けの原則>である。この概念は、様々な人々が平和に別々に共存する<共生>とは異なる。むしろ、生物学的意味で、強者同士が争い、そのすき間に弱者が入り込み、結果として、異なる種が空間的に同時に存在し、別々にまとまって住む、といったイメージに近い。

例えば、クラシック音楽の愛好者というのは典型的な中産階級を母胎とする文化階層である。実態ははっきりとわかっていないが、オーケストラ音楽に限って、芸団協(社団法人日本芸能実演家団体協議会)の行った調査結果を基に簡単に説明してみよう。彼らの推計によると、1991年段階で、オーケストラ愛好者は日本全体で250万人いて、コンサートの出かけた人々の合計は年間のべ370万人にのぼると推計される。(芸団協リサーチレポート「ザ・オーケストラ」、丸善、1995年、233頁)愛好者は、東京圏に多いが、

演奏者や演奏団体そのものは、全国的に分布している。彼らの際立った特色は、その学歴と経済的収入の高さにある。(特に、東京圏ではその特色がはっきりしている。)要するに、高学歴・高収入なのである。また、芸大関係者(芸大に通っている学生・出身者など)により主にその中核が構成されており、彼らはある種の階層の再生産のサイクルを作り上げているといっていだらう。

6-2 ハイブリッドな階層としてのインフォミドル

インフォミドルは、ニューメディア産業を中心としながらも、広い意味での文化産業に関わる人々から構成されている。彼らの特色は、なんといっても、そのハイブリッド性にある。特に、コンピュータ文化やインターネットなどの新しい通信文化は、生な現実と電子的現実からできあがるハイブリッド文化である。大切なことは、このハイブリッド文化は、今まであった、既存の中産階級文化を崩していく面と、継承して発展させていく面と両面を持っているという点である。前者の点を強調すると、いわば、さいころをシャッフルし直すような、社会移動のチャンスが訪れていることを意味する。また、社会的平等や社会的弱者をサポートする新しいチャンスの意味する側面もある。しかし、それは、自動的にそのチャンスが実現できるということの意味しない。むしろ、新しい、中産階級の戦いが始まった、それも、地球社会の規模で、ということも冷厳な事実であろう。むしろ、日本社会でいえば、今までの、国家官僚や大企業エリートなどの優位が弱まる可能性が生まれ、新たな階級生成の機会が生まれつつあるというべきであろう。しかし、彼らの抵抗と巻き返しは強烈であり、また、海外からの様々な競争勢力の進出も積極的に行われつつある。そういう環境下で、どういう中産階級が期待されるのであろうか。

6-3 積極的なインフォミドル像の実現

大切なことは、インフォミドルの社会的特色である。少なくとも、今までの、日本社会における中産階級の歴史をひもとくと、大正期における市民階級、第二次大戦後の知識人・市民階級、を除いて、いづれも消極的あるいは受動的な中産階級像しか見られなかったといっていだらう。大正期の市民階級は、東京や大阪などの大都市に限定され、しかも、エリート層や高級サラリーマンを中心とした、かなり層の薄い、しかも、第二次大戦後の中産階級にはっきりと継承されにくかった。後者の、知識人・市民階級についても、それなりの重要な社会的な機能を果たして来つつも、マルクス主義の影響を強く受けたことと市民社会自体の確立・成熟が十分でないことにより、日本社会における文化の積極的中心とはいいいにくいのが、歴史的事実である。

第二次大戦が終わり、55年が経過した今、そろそろ、本当の意味で、積極的で、健全な中産階級の文化が登場してもいいのではないだろうか。その一つの候補が、インフォミドルなのである。

付記：本論文を執筆するにあたり、主に、慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所からの研究助成を受けている。これ以外にも、トヨタ財団・サントリー文化財団・文部省科学研究費(基盤研究B)などの助成を受けている。これらの方々に、感謝したい。また、本論文は、近著「東京インフォミドル」の内容を要約している。合わせてこちらも参照していただけたらと思う。

文献と参考ウェブサイト

- アクロス編集部 (編) (1989), WASPワスプ: 90年代のキーワード, パルコ出版
- 電通総研 (1998), 情報メディア産業の都市集中, 電通総研
- 芸団協 (編) (1995), ザ・オーケストラ, 丸善出版部
- 浜野保樹 (1999), 日本アニメ興国論, 中央公論 4月号, pp. 138-153
- 浜野保樹 (2000), 質・量のみでの日本製アニメ, 中央公論 9月号, pp. 207-211
- 原純輔・盛山和夫 (1999), 社会階層: 豊かさの中の不平等, 東京大学出版会
- 原武史 (1998), <民都>大阪 対 <帝都>東京, 講談社
- 平野健一郎 (2000), 国際文化関係論, 東京大学出版会
- 岩淵公一 (1998), 文化的無臭性それともアジアンモダニティの芳香? (変容するアジアと日本に所収, 五十嵐暁郎 (編)), 世織書房, pp. 42-77
- 岩淵公一 (1998), グローバリゼーションのなかの日本文化の匂い, 世界, No. 647, 岩波書店, pp. 69-81
- 片岡栄美 (編) (1998), 社会階層と文化的再生産, 文部省科学研究費補助金研究成果報告書
- 加藤秀俊 (1990), <東京>の社会学, PHP文庫
- 川崎賢一 (1994), 情報社会と現代日本文化, 東京大学出版会
- 川崎賢一 (1998), 文化政策としての<Compartmentalization Strategy>, 文化経済学, Vol. 1, No. 2, pp. 17-23
- 川崎賢一 (編) (1999), 現代日本の文化政策をめぐって, 文部省科研費 (国際学術研究 (共同研究)) 平成10年度研究成果報告書
- 久保雅一 (2000), ポケモン米国制覇の秘密, 論座, 58号, 朝日新聞社, pp. 78-6
- 姜尚中・吉見俊哉 (1999), グローバルシティの逆説, 世界No. 666, 岩波書店, pp. 219-231
- 国際交流基金 (編) (1996), 東京は21世紀の都市モデルか, アンチモデルか, 国際交流, 第72号, 国際交流基金, pp. 2-83
- 小長谷一之・富沢木実 (1999), マルチメディア都市の戦略, 東洋経済新報社
- 町村敬志 (1994), <世界都市>東京の構造転換, 東京大学出版会
- 町村敬志 (1999), 越境者たちのロサンゼルス, 平凡社
- NIRA (1992), 世界都市東京に関する研究, 政策研究, Vol. 5, No. 2, 総合研究開発機構
- NIRA (1995), 世界都市の研究 東京の課題 (その2), 政策研究, Vol. 8, No. 9, 総合研究開発機構
- NIRA (1996), プレ・ハピタットII 東京会議, 政策研究, Vol. 9, No. 2, 総合研究開発機構
- 西村晃・八田真美子 (1999), <渋谷系>経済学, PHP研究所
- 佐々木雅幸 (1997), 創造都市の経済学, 劉草書房
- 佐藤郁哉 (1997), アートはビジネス足りうるか? (比較社会に所収, 刈谷剛彦 (編)), 有斐閣, pp. 58-80
- 佐藤郁哉 (1999), 現代演劇のフィールドワーク, 東京大学出版会
- 関口尚志・梅津順一・道重一郎 (編) (1999), 中産層文化と近代, 日本評論社
- 世田谷美術館 (編) (1989), 田園と住まい展, 世田谷美術館
- 島根國士・寺田元一 (編) (1999), 国際文化学への招待, 新評論
- 白水繁彦 (1998), エスニック文化のフィールドワーク, 日本評論社
- 鈴木博之 (1996), ロンドン: 地主と都市デザイン, 筑摩書房
- 高橋優悦・園部雅幸・川崎賢一 (編纂) (1992), せたがや百年史 (全2巻), 世田谷区
- 田中宏 (1995), 在日外国人 (新版), 岩波書店
- 東京都 (1988), 東京の都市計画百年, 東京都
- 東京都 (1994), 東京都国際政策推進大綱, 東京都
- 東京都 (1995), 東京住宅白書, 東京都
- 東京都 (1996), 東京都市白書96, 東京都
- 都築響一 (1997), Tokyo Style, 京都書院
- 山口廣 (編) (1987), 郊外住宅地の系譜, 鹿島出版会
- 渡辺和博 (1988), 金魂巻, 筑摩書房
- Bennett, Tony. (1998), Culture: A Reformer's Science, SAGE Publishers.
- Bureau of Citizens and Cultural Affairs (ed.) (1994), Tokyo Metropolis: Facts & Data, Tokyo Metropolitan Government
- CCS (1988), Tokyo: Growth and Planning 1868 - 1988, Centre for City Study in Tokyo Metropolitan University
- Cybrivsky, Roman (1998), Tokyo: The Shogun's City at the Twenty-First Century, John Wiley & Sons
- DIHS (1996), Japan's Info-Media Business, Dentsu Institute for Human Studies
- Elger, Tony and Smith, Chris (eds.) (1994), Global Japanization: Transnational Transformation of the Labour Process, Routledge
- Fainstein, Susan S., Gordon Ian and Harloe Michael (eds.) (1992), Divided Cities: New York & London in the Contemporary World, Blackwell Publishers
- Featherstone, Mike (ed.) (1990), Global Culture: Nationalism, Globalization and Modernity, Sage Publications
- Giddens, Anthony (1999), The Third Way, Polity Press
- Giddens, Anthony (2000), The Third Way and its Critics, Polity Press

- Haskel, Lisa . (1996) , Plugged in Multimedia and the Arts in London, London Arts Board
- Haywood, Trevor 1995, Info-rich/Info-poor: Access and Exchange in the Global Information Society, Bowker-Saur
- Held, David (1995) , Democracy and the Global Order: From the Modern State to Cosmopolitan Governance, Polity Press
- Held, David, McGrew Anthony, Goldblatt David and Perraton Jonathan (1999) , Global Transformations: Politics, Economics and Culture, Stanford U.P.
- IPA (1989) , Making Tokyo World City, Institute of Public Administration
- Katz, Raul L . (1988) , The Information Society, Praeger Publishers.
- K.Kawasaki (1997) , " Cultural Globalization and Global Cities " , Journal of the Faculty of Letters No.55, Komazawa University, pp. 51-80
- K.Kawasaki (ed.)(1998) , Characteristics of Art Policies in Four Countries : A Report of Tokyo Conference, A Report of Grant-in-Aid (Joint Research) , The Ministry of Education in Japan
- K. Kawasaki (ed.)(1999) , Art Policies in East and West: A Report of Singapore & Birmingham Conference, A Report of Grant-in-Aid (Joint Research) , The Ministry of Education in Japan
- Knox, Paul L. and Taylor, Peter J . (eds.)(1995) , World Cities in a World System, Cambridge U.P.
- Lent, John A . (ed.)(1995) , Asian Popular Culture, Westview Press
- Marcuse, Peter and van Kempen, Ronald (eds.)(2000) , Globalizing Cities: A New Spacial Order, Blackwell Publisher
- Matheson, Jill and Holding Alison (eds.)(1999) , Focus on London99, the Office for National Statistics
- Miyashi, Masao and Harootunian, H.D . (eds.)(1989) , Postmodernism and Japan, Duke U.P.
- Mollenkopf, John H. and Castells, Manuel (eds.)(1992) , Russell Sage Foundation
- Mowlana, Hamid (1986) , Global Information and World Communication, Longman Inc.
- The Port Authority of NY & NJ (1993) , The Arts as an Industry: Their Economic Importance to the New York-New Jersey Metropolitan Region, The Port Authority of NY & NJ
- Rothkopf, David (1997) , " In Praise of Cultural Imperialism ? " , Foreign Policy No. 107, pp. 38-53
- Sasaki Nobuo , (1998) , " A Study of the Political Leadership of Tokyo Metropolitan Governors " , International Review of Administrative Sciences Vol. 64, No. 2, pp. 247-260
- Sassen, Saskia (1996) , Losing Control?: Sovereignty in an Age of Globalization, Columbia U.P.
- Sen, Amartya (1992) , Inequality Reexamined, Oxford U.P.
- Shilling, Mark (1997) , The Encyclopedia of Japanese POP Culture, Weatherhill Inc.
- Tapscott, Don 1998, Growing up Digital: The Rise of the Net Generation, The MacGraw-Hill Companies
- Tokyo Metropolitan Government (1996) , Tokyo Life: Culture, People and Government, Tokyo Metropolitan Government
- Towse, Ruth (1996) , The Economics of Artists ' Labour Markets, The Arts Council of England
- Trabers, T., Stokes, E. and Kleinman, M. (1995) , The Arts and Cultural Industries in the London Economy, London Arts Board
- Weiner, Myron (1995) , The Global Migration Crisis: Challenge to States and to Human Rights, HarperCollins College Publishers
- Zacher, Mark W . (1996) , Governing Global Networks: International Reimes for Transportation and Communications, Cambridge U.P.
- Zukin, Sharon (1995) , The Cultures of Cities, Blackwell Publishers

<http://www.seikatubunka.metro.tokyo.jp> (Tokyo Metropolitan Government)

(川崎 賢一 駒澤大学文学部教授)